



福井市自然史博物館

博物館だより

FUKUI CITY MUSEUM OF NATURAL HISTORY NEWSLETTER



アライグマ *Procyon lotor* / 足羽山, 2013.12.18 自動撮影カメラで撮影

福井の自然史情報

アライグマ（特定外来生物）

アライグマは北アメリカ原産の哺乳類です。1970年代にペットとして大流行しましたが、成長すると気性が荒くなり飼育が困難になるためたくさんの個体が遺棄されました。その結果、日本各地で野生化し増え続けています。アライグマをはじめとした外来生物は人間の経済活動と生態系の両方に大きな被害をもたらしています。そのため各地で外来生物の駆除事業が行われていますが、根絶のためには地域ぐるみで取り組む必要があります。



中面と裏面に外来種問題についての詳しい解説があります。



福井の外来種



福井県は海辺から亜高山帯まで多様な自然環境に恵まれた生物多様性が高い地域です。そんな福井県にもたくさんの外来種が侵入しており、生態系への影響が心配されています。ここではその一部を紹介します。

シベリアイタチ



〔写真1〕シベリアイタチ
(足羽山、2013年9月29日、
自動撮影カメラにより撮影)



〔写真2〕ニホンイタチ(上)と
シベリアイタチ(下)の仮剥製(当館所蔵)

イタチは里山や河川敷などでよく目撃される身近な動物です。

しかし、一般的にイタチと呼ばれている動物が2種いることはあまり知られていません。1種はニホンイタチで、昔から本州、四国、九州とその周辺の島々に生息している在来種です。もう1種はシベリアイタチ(チョウセンイタチ)という朝鮮半島から移入された外来種で、西日本に広く分布しており、現在も分布を拡大しているようです。これら2種はよく似ていますが、一般的にシベリアイタチには尾が長いという特徴がみられます〔写真2〕。福井県では、つい最近まで嶺南地方でしかシベリアイタチの生息が確認されていませんでしたが、2006年に嶺北地方(福井市)で初めて発見されました。シベリアイタチが生態系にどのような影響を与えるのかはよく分かっていませんが、ニホンイタチの生息場所を奪っていると言われていいます。イタチ2種の今後の動向に要注目です。

(学芸員 鈴木 聡)

シタベニハゴロモ



〔写真1〕シンジュの幹で見つかったシタベニハゴロモ
(あわら市吉崎、2013年10月10日)



〔写真2〕シタベニハゴロモの
展翅標本(当館所蔵)

カメムシ目(半翅目) ピウハゴロ

モ科に属する昆虫であり、中国、台湾、ベトナム、インドに分布しています。2006年に韓国で発生が確認された後、2009年には日本でも石川県小松市で初めて見つかり、同地域での定着も確認されました。

福井県内では、あわら市吉崎で2013年8月に市民によって本種の写真が撮影されました。問い合わせを受け、当館が調査に出かけたところ、2013年10月に同地域北潟湖畔のシンジュ(ニワウルシ)の木から3個体の成虫を確認〔写真1〕。同年11月にはシンジュの木の幹とその近くの廃屋の壁面から本種の卵塊が確認され、福井県内への本種の侵入が記録されました。

石川県では2009年に発生が確認されて以来、分布域を拡大しています。また、2009年、2010年には大発生が確認され、寄生を受けたシンジュそのものが枯死し、景観を損なう例も報告されています。今後、福井県内でも分布を拡大する可能性があり、その動向が注目されます。(学芸員 梅村信哉)

タイワンシジミ



タイワンシジミの標本(当館所蔵)

中国大陸および台湾が原産の淡水性

二枚貝です。食用として輸入されたものが野生で定着したと考えられており、ホタルの餌として放流されたカワニナに混じって拡散した例もあります。福井市内でも用水路などで生息しているのが見つかっています。

在来種のマシジミと比べて繁殖力や水質汚染への耐性が強く、マシジミの生息域に侵入すると交雑によって数年で置き換わってしまうことから、要注意外来生物に指定されています。一方で、マシジミとタイワンシジミは遺伝的に近縁で形態もよく似ているため、両者を同一の種とする見解もあります。

(学芸員 有馬達也)

モウソウチク



モウソウチク林
(足羽山、2013年6月28日、吉澤康暢撮影)

モウソウチクは、かつて中国から日本に移入された外来植物です。古くから土

木資材や生活資材などとして利用されてきたほか、タケノコの収穫のために栽培されてきました。しかし、近年竹材の代替資材の普及や安価な外国産タケノコの輸入などにより利用価値が低下し、次第に竹林は放置されるようになりました。

足羽山でも放置されたモウソウチク林の繁茂が顕著になっています。モウソウチクは、地下茎の伸長により生育域を拡大し、地下茎から発生するタケノコが旺盛な成長を遂げることで繁茂します。モウソウチクのタケノコが竹林周辺の他の林の中にも発生し、分布を広げています。(学芸員 中村幸世)

まちなかに残る自然「足羽山」

2014年3月21日(金・祝)～5月18日(日)

身近な自然「足羽山」の魅力に迫る!!

福井市のほぼ中央に位置する足羽山。多様な動植物が生息し、福井市民にとって身近な存在である足羽山ですが、それぞれの生きものの生活史や命のつながりなど、実はまだまだ知られていないことがたくさんあります。自然史博物館では、足羽山の現状を明らかにし、環境保全を行っていくために2013年度より足羽山総合調査を開始しました。特別展「足羽山」では、その1年目の調査成果を踏まえて足羽山の知られていない自然、見どころを紹介します。

本特別展では、足羽山の「水辺」、「落葉広葉樹林」、「常緑樹林」、「竹林」の4つの環境にスポットを当て紹介していきます。

「水辺」コーナーでは、足羽山の水辺に集まるカエルとそれを取り巻く生きものの関係などについて紹介します。また、過去の資料より推察した足羽山の水辺環境の変遷を展示、解説します。

「落葉広葉樹林」コーナーでは、足羽山に広く分布しているコナラの森を中心に、カブトムシやギフチョウ、カタクリなど足羽山を代表する生きものたちの生活史を紹介します。

「常緑樹林」コーナーでは、足羽山東部にある常緑樹の森を中心に、シラカシやモミなどの常緑樹の説明や、地面の下に生きる土壤動物などを紹介します。

「竹林」コーナーでは現在足羽山で勢力を増しているモウソウチクについて、その詳しい現状や問題点などを紹介します。



▲カタクリの群生



▲モリアオガエル



▲カタクリ



外来種問題あれこれ

保科 英人(福井大学教育地域科学部准教授)

「外来種」とは他地域から人に連れて来られたのち、人の手を離れて自活し、繁殖して子孫を残している生物である。つまり、飼育員から毎日エサを貰っている動物園のライオンやトラは外来種とは言わない。とある有名な評論家は、後述するオオクチバス〔写真1〕を擁護したいがために、「(栽培されている)キャベツやサツマイモだって外来種ではないか、なぜオオクチバスだけ目の敵にするのか」と述べているが、トンチンカンな理屈である。外来種の定義を全く理解していないのだ。

2005年6月に施行された「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」という法律がある。国内にゴマンといる外来種のうち、この法律に基づいて特定外来生物というものに指定されると、厳しい法的規制を受ける。福井市内の道路沿いならどこでも見かけるオオキンケイギクは特定外来生物の一例である〔写真2〕。

外来種がもたらす悪影響は主に以下の3つに大別できる。(1)人身への直接的被害、(2)農林水産業などへの経済的被害、(3)自然生態系への被害、である。たとえば、悪名高きオオクチバスやコクチバス(両者合わせてブラックバスと総称される)

の悪影響は(2)と(3)両方にまたがる。アユやワカサギなどを食うブラックバスは各地の内水面漁業へ深刻な被害を与えているし、希少淡水魚や水生昆虫類への捕食圧も甚大なものがある。

一方、アライグマは(1)(2)(3)全ての分野にわたる被害をもたらしている〔写真3〕。アライグマは農作物を食い荒らすことは言わずもがな、アライグマ回虫や狂犬病を媒介することに加え、希少サンショウウオ類や地表徘徊性コウチュウ類などを捕食する。

結局のところ、オオクチバスやアライグマはこれ以上の分布拡大を防ぎつつ、最終的には駆除していくしかない。本稿でオオクチバスやアライグマをわざわざ取り上げたのは、駆除を進める際に邪魔となる特殊な事情が存在するからだ。たとえば、毒グモとして有名な外来種セアカゴケグモを駆除しても、まず誰も文句を言わない。しかし、オオクチバスには、それを有効利用したい釣り人および業界がある。一方、アライグマの場合



〔写真1〕 オオクチバス

は「こんな可愛い動物を殺すな!」という愛護団体の妨害が立ちほだかる。

日本に無理やり連れてこられたアライグマやオオクチバスに責任があるわけがない。外来種問題には様々な立場や意見があるが、この問題は我々人間に100%の責任があるがゆえに、自分たちが尻拭いをする責務があるのだ。



〔写真2〕 オオキンケイギク



〔写真3〕 アライグマ

《あとがき》

今号では、外来種問題を取り上げました。私たち人間がほかの地域から持ち込んだ外来生物は生態系や私たちの生活に様々な影響を及ぼしています。私たち一人一人がこの問題に向き合っていくべきではないでしょうか。

3月21日から第77回特別展「まちなかに残された自然-足羽山」が始まります。当館の学芸員による調査成果をもとに足羽山の魅力を紹介します。その中で足羽山に残っている貴重な自然だけではなく、足羽山の生態系に変化をもたらしつつある外来種モウソウチクの現状などについても取り上げます。この機会に身近な自然に触れたり学んだりしながら、これからの福井や足羽山の自然のあり方や関わり方について考えてみませんか。(鈴木)

《交通案内》

- 【電車】
 - 福井鉄道福武線 公園口駅 徒歩20分
- 【バス】
 - 京福バス:清水グリーンライン(74系統) 足羽山公園下バス停(あじさいの道登る)、不動山口バス停(藤島神社登る) 各徒歩10分
 - コミュニティバスすまいる:西ルート(足羽・照手方面) 愛宕坂バス停 徒歩10分
- 【徒歩】JR福井駅から徒歩30分

《ご利用案内》

- 開館時間 ●午前9時～午後5時15分(入館は午後4時45分まで)
- 休館日 ●月曜日(祝休日は開館)、国民の祝休日の翌日、年末年始
- 入館料 ●高校生以上100円(20名以上の団体は半額)
中学生以下、70歳以上、障害者および付添の方は無料

